

聖書：ヤコブ 1：5～11

説教題：神に願いなさい

日時：2017年7月23日（朝拝）

このヤコブの手紙は、エルサレム教会の牧師ヤコブが、ステパノのことから起こった迫害によって散らされたユダヤ人クリスチャンたちに宛てた手紙です。その手紙は出だしからインパクトあるメッセージで始まっています。ヤコブは2節で「さまざまな試練に会うときは、それをこの上もない喜びと思いなさい」と語りました。この手紙の受取人たちは散らされて出て行った先々で社会的・経済的に圧迫されていました。その状況にあることを喜べ！とは一体どういうことでしょうか。ヤコブが前回語ったことは、そこには神のご計画と摂理があるということでした。それはあなたがたがやがて何一つ欠けたところのない、成長を遂げた、完全な者となるための導きであると。今日はその続きを読んで行きます。

5節でヤコブは「あなたがたの中に知恵の欠けた人がいるなら」と言います。これはどういう意味で知恵の欠けた人のことでしょうか。2～4節の流れを考えると、それは神の良いご計画と導きがそこにあると分かっても、実際の試練を前にしてどう考えたら良いのか、またどう行動したら良いのか、力不足、知恵不足を感じる人のことでしょう。いやこれは私たち皆に当てはまることだと思います。私たちはやがて「何一つ欠けたところのない者」となるように導かれています。まだそこに到達していない私たちは色々な点において欠けています。ここで言われている知恵においても欠けています。もし自分の人生を正しく神の視点で見ることができたら何と幸いなことでしょうか。その人は確かにその試練を、この上もなく喜ぶことができるでしょう。しかし知恵が欠けているので、私たちは色々悩むのです。

そんな私たちへのグッド・ニュースがここにあります。自分に知恵が欠けていることを思うなら神に願い求めよ！そうすれば神が与えてくださると。祈りは弱い私たちが支えられるために神が与えてくださった恵みの手段です。私たちはこの祈りを通して強くされ、神から洞察力を与えられ、天の視点で自分の人生を見つめて歩んで行くことができるのです。

ヤコブは祈りの生活を励ますために、まず神はどんな方かに注目させます。まず言わ

れているのは「お与えになる神」。神は「与える」ことをご自身の特性とされる神です。また「惜しげなく」。神は与える際、どうしようか、やっぱりやめておこうか、少し出し惜しみしようか、などとは考えない。この言葉は8節に出てくる「二心」と反対の意味の言葉です。すなわち心が二つに別れていない。神は私たちに対して一つ心で関わってくださる方です。また「とがめることなく」。人間の場合、繰り返し近づくと疎んじられることがあります。「え？また？」とか、「この前もあげたでしょう？」とか「前にあげたものはどうしたの？」等々。神はそのようにとがめず、何度でも私たちが近づくことを喜んで受け入れてくださいます。そして「だれにでも」。神はえこひいきされません。ご自分の子らに対しては、だれにでも、惜しげなく、とがめることなく与える神です。

このような神を仰いで知恵を願いなさい！とヤコブは言います。そうすればきっと与えられます、と。ここはもっと単純に「そうすれば与えられます」とすっきりはっきり訳す方が良いと思います。マタイの福音書7章7節：「求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます。」

ヤコブはこの際、祈る私たちの態度に関する注意も6～8節で述べています。祈る際に大事なこと、それは信じて祈ることであると。その反対のヤコブがここで問題にしていることは疑いながら祈ること、あるいは二心で祈ることです。二心とは、信じる心と信じない心の両方が同居している心のことです。たとえば私たちもこのような時がないでしょうか。神に助けを求めて祈るのですが、その祈りを終える前に心で思うのです。「そうなることはまずないでしょう」と。神の約束を覚えて祈りながら、心の底では信じていない。もちろんこれはそのような戦いが心の中に少しでも起こったら、もうその祈りは聞かれないということではありません。「彼（アブラハム）は、不信仰によって神を疑うようなことをせず、信仰がますます強くなって、神に栄光を帰し、神には約束されたことを成就する力があることを堅く信じました。」（ローマ4：20）パウロはアブラハムは神を疑わなかったと言い切っていますが、創世記にはアブラハムがイサク誕生の約束を聞いて笑ったという記事も出て来ます。つまりアブラハムにも信仰と不信仰の戦いはあったのです。しかし彼についてパウロは、疑わなかった、信じて歩んだと言っています。ですから私たちも100点満点の完全な祈りでなければならないということではありません。ヤコブがここで問題にしているのは中途半端な祈りです。口では祈るが心では信じていないという状態を自分に許していること、あるいは本当は信じていな

いが一応祈っておくという態度。それでは主から何かを頂けるとは思っていない。そういう二心の人は神に祈るよりももっと自分の生活が守られる方法があると聞けば、そちらに走って行くでしょう。そういう人は6節にあるように風に吹かれて揺れ動く海の大波のよう。海の波は風に吹かれて一時も同じ姿をしていません。常に動いています。そういう人は8節にあるように、その歩む道のすべてに安定を欠いた人となります。

私たちは改めて問われます。私は祈る時、信じて祈っているだろうか。二心で祈っていることはないだろうか。信じて祈るために大切なことは、自分は信じているか、自分は信じているか、と自分ばかり見つめるのではなく、祈る相手である神をしっかり見上げることでしょう。神は与えることをご自身の特性とされる神です。だれにでも、惜しげなく、とがめることもなく、与えてくださる方です。その方を見上げて信じて願う。そのことを通して私たちは知恵を頂き、天の視点を頂き、上からの励ましと力を頂いて神が与えてくださっている試練に立ち向かうことができるのです。

続く9節以降には、この手紙の受取人たちが置かれた状況のことが記されています。おそらくこのことが彼らの直面していた試練の代表的なものだったのでしょう。それは貧しさあるいは豊かさの問題です。ヤコブはまず9節で「貧しい境遇にある兄弟は」と言います。先に触れたように、彼らは迫害によってエルサレムを追われ、行く先々で経済的・社会的圧迫を受けていました。その中でともすれば失意、落胆、あるいは絶望の毎日を送りやすい状態にあったのでしょう。そんな彼らにヤコブは「自分の高い身分を誇りとしなさい!」と言います。これは一体どういうことでしょうか。自分たちは貧乏で、社会的地位もなく、底辺でギリギリ生きているあわれな者たちではないのか! そう彼らは思ったに違いありません。しかしヤコブが言っているのは、そんな表面のことではないのです。彼が言っている身分とはキリストにあって与えられた栄えある身分のことです。2章5節:「よく聞きなさい。愛する兄弟たち。神は、この世の貧しい人たちを選んで信仰に富む者とし、神を愛する者に約束されている御国を相続する者とされたではありませんか。」 彼らは信仰に富む者とされ、今や必ず天の御国に住む者とされました。そういう彼らは今やキリストにあってすべてを持つ者とされたと言っても良い。キリストを兄上とし、神を父とする、世界で最も豊かな人たちと言えます。聖書の他の箇所もそう述べています。ローマ8章32節。Iコリント3章22節。なのに私たちはこの素晴らしい特権をしばしば見失います。そして何も持っていないあわれな者であるかのように思い、嘆き、心が定まらない生活を送りやすいのです。ですから自分が今、どんな霊

的祝福の状態に置かれているかをはっきり認識するために、またその視点に立って地上における信仰の歩みをささげるために、私たちは上からの知恵を是非とも必要としているのではないのでしょうか。

次の 10 節には反対に「富んでいる人は」と出て来ます。ここで問題になるのは、これは誰のことなのかということです。未信者の金持ちのことか、それとも信者の中の金持ちのことか。これについては注解者たちの意見も真っ二つに分かれています。ある人はこれはこの世の金持ちのことであると見ます。その人たちが指摘するのは、この手紙では富んでいる人たちがクリスチャンを迫害し、やがてさばきを身に招く人たちとして否定的に語られているという点です。2 章 6 節の 2 行目から：「あなたがたをしいたげるのは富んだ人たちではありませんか。また、あなたがたを裁判所に引いて行くのも彼らではありませんか。あなたがたがその名で呼ばれている尊い御名をけがすのも彼らではありませんか。」 5 章 1 節：「聞きなさい。金持ちたち。あなたがたの上に迫って来る悲惨を思って泣き叫びなさい。」 このように理解する場合、今日の 10 節の「自分が低くされることに誇りを持ちなさい」という言葉は、皮肉めいた言葉となります。あなたがたは今富んでいるが、やがて低められるのだから、せいぜいそのことを誇りなさい！と。一方、他のある人たちはこれは信者の中の富んでいる人たちを指すと見ます。その人たちが指摘するのは、9 節の「誇りとしなさい」という動詞が 9 節と 10 節の両方にかかるように、9 節の「兄弟」という言葉も 9 節と 10 節の両方にかかるものとして読むべきだということです。またもし 10 節を先ほどのように理解するとしたら、それは尋常ではない、あまりに辛辣な言葉になってしまうということです。こちらの理解を取った場合、「自分が低くされることに誇りを持ちなさい」とはどういう意味になるのでしょうか。それは富んでいる信者たちは、そのことで周りから高く見られることがあっても、自分はキリストと結ばれ、その民の一人であるという、この世から見たら低い身分にあることを誇りなさいということになるでしょう。上流階級にある人、この世的に成功している人たちにとって、自分はキリスト信者であると公言することは、当時において（今日も？）社会的名声を失うこと、自分の評判を落とすことだったでしょう。しかしそのことを誇りとしなさいということです。

いずれにせよヤコブがここで強調していることは、この世の富や物質的豊かさのほかなさです。10 節後半の「なぜなら、富んでいる人は、草の花のように過ぎ去っていくからです。」という言葉は、イザヤ書 40 章 8 節の「草は枯れ、花はしぼむ」という言葉を

思い起こさせます。いかにある時、美しく咲いても、その花の美しさははかないものであり、ほんの一瞬のものでしかない。続く 11 節にもこうあります。「太陽が熱風を伴って上って来ると、草を枯らしてしまいます。すると、その花は落ち、美しい姿は滅びます。」これはユダヤ人たちが良く知っている現象だったようです。春に美しく咲いた花も、パレスチナの照りつける太陽の光が熱風を伴ってやって来ると一気にしなびてしまう。あれだけ咲き誇り、人の目を楽しませていた花や草が、突然無残な姿に変わり果ててしまう。それと「同じように、富んでいる人も、働きの最中に消えて行くのです。」とヤコブは言います。注目すべきは段々と落ち目になるというのではない。富を増し加えるために益々精力的に働いているその働きの最中に突然その人自身の終わりが来る。思い起こされるのはルカの福音書 12 章の愚かな金持ちのたとえでしょう。新しい倉を建て、わが魂よ、さあこれからは安心して食べて、飲んで、楽しめ、と自分に向かって言ったその日に、神が現われて、「愚か者。おまえの魂は、今夜おまえから取り去られるのだ。そうしたら、おまえが用意したものは、いったい誰のものになるのか。」と言われます。あまりに突然のことです。その時になって初めて彼は自分が間違った生き方をしてきたことに気がついた。自分が信頼を寄せた富が肝心なこの時に何の助けにもならないことを知った。そして自分はこの日まで、永遠の生活のために何の備えもして来なかったという重大な事実気がつかされた。富の恐いところは実にそのことでしょう。私たちに偽りの安心感を抱かせます。いつまでもそれが自分を守ってくれるように思い込ませる。しかしそれは過ぎ去ってしまうものなのです。だからそれらに重心を置いて間違った人生を歩まないように！とヤコブは言っているのではないのでしょうか。そのことで心悩ませたり、貴重な人生を無駄使いせず、永遠の視点に立ち、神の視点に立って人生を考え、天の御国につながる神の祝福の道こそを歩むように！と。

今日の私たちの時代も物質主義の時代と言われています。多くの富と沢山のものを持っている人が幸いな人、人生の勝ち組と見られています。様々なコマーシャルを通して、新しくより高価なものを持っている人が人生の成功者だと見られています。そういうこの世の見方に私たちも振り回されていることはないでしょうか。高い身分を頂いているのに、それを過小評価し、経済や生活レベルのことで失望・落胆し、あるいは反対に高ぶって生活していることはないでしょうか。私たちはそれぞれ地上にあって様々な状況に置かれていますが、大事なことは神の視点を頂いて歩むことです。やがて突然消えてしまうものに重心を置く生活ではなく、神が私に対して持っていてくださるご計画をわきまえ知り、その光の下で栄光のゴールを目ざす歩みをすることです。そのために私た

ちが日々必要とするのが、5節の「知恵」なのではないでしょうか。自分の置かれた状況をどのような目で見るとすべきか、またどのように生きて行くべきか、神の御心を知り、それを適用するための洞察力です。私たちはその知恵が自分に欠けていることを思うなら、祈りを通して神に求めたいと思います。信じて祈る祈りを通して神はそれを私たちに与えてくださいます。その知恵を頂く時に、私たちはどんな試練の中にあっても、それをむしろ喜びとして生きるように導かれます。なぜなら神はそのことを通して、私に対する救いのみわざをさらに進めて下さるからです。神は行く先に、私たちが何一つ欠けたところのない、成長を遂げた、完全な者となるという祝福を備えていてくださいます。